

先生に言いつけにくる子どもへの支援

A子、小学校二年生。活発で学習にも意欲的。同級生に対しても積極的にかかわっていくタイプ。二年生に進級してから、「○○さんが××していました」などと、何かと友達のことを担任に言いつけにくるようになった。担任は、活発なA子だからこそ自分のことを自分でできるようになってほしいと願い、人のことよりも、自分のことをきちんとやるように指導してきた。しかし、指導しても、A子が言いつけにくることは減らなかった。それだけではなく、非難がましく友達に注意するようになり、注意された相手の子が泣いてしまうなど、友達間のトラブルになってきている。担任は、A子の言い方がきついことを指導しているが、言いつけにくることや友達を注意することは続いている。

小学校の低学年では、子どもたちは些細なことでも担任の先生に報告してくることが多いと思います。他の子どものことを言いつけにくる子どももいます。子どもの自立を促していくためには、通常、その子ども自身が自分のことをきちんとやるように行動を促す働きかけをしていくこ

10秒

とも思います。しかし、教師からの働きかけが子どもの良い変化につながらない場合もあります。この事例では、A子の行動は必ずしも悪い行動とはいえません。しかし、それがトラブルのきっかけとなっているため、トラブルを防ぐためにも何らかの対応が必要だと思われれます。どんなふうにかかわっていけばよいでしょうか。

「良いことをしている子を見つけて教えて」と投げかけてみる

.....

A子の言動はトラブルのもとになっていますが、A子にはプラスの面やできていることがたくさんあります。例えば、A子は友達のことをよく見ているからこそ、友達のことを言いつけにすることができるとは思います。何度も担任に言いにくくても、A子のできていることのひとつです。わざわざ言いにくる行動からは、担任の先生に認めてほしいという気持ちもあると想像されます。こういった気持ちも、二年生という年齢を考えると、A子のプラスの面だと考えられます。

こういったできていることやプラスの面は「リソース」としてとらえられ、これらのリソースをうまく活用していくことが、有効な支援につながっていきます。

では、これらのリソースを活用した支援を考えてみましょう。

例えば、良いことをしている子を見つけて担任に報告するようにA子に働きかけてみるという支援があります。他の子どものことをよく見ているということ、教師まで言ってくることで、A子に、次のように投げかけてみます。

「あなたは、友達のことをよく見ているから、それはすごいよね。だから今度は、良いことをしている子を見つけたら、先生にも教えてね。良いことをしている子を見つければ、意外と難しいよ〜」

この働きかけがうまくいくかどうかは、やってみなくてはわかりません。指導がうまくいった場合には、A子は「○○さんが、××さんに消しゴムを貸してあげてたよ」などと、他の子どもの良いことを報告してくれます。そこで、良いことを報告してくれたということ、きちんとしてあげたいと思います。「ちゃんと、友達の良いところを見つけれられるのはすごいね。教えてくれて先生もうれしいなあ」などと、しっかりとほめることが大切です。

しかし、この働きかけがうまくいかなかった場合は、どうなるでしょうか。その場合でも、それほど困った事態にはなりません。うまくいなくても、今までと同じようなことが起きるだけです。

こんなふうには、リソースを活用した支援は、支援が逆効果になる危険性が低いいため、実施しやすいという特徴があります。

こらむ 1 リソース

リソース (resource) とは、辞書を引くと、資源という意味が出てきます。カウンセリングなどの対人支援の領域では非常に重要性が高い概念です。資源という言葉で語られるこ

30秒

ともありますが、リソースというカタカナで使われることが多いと思います。

一般には、リソースはプラスの面、プラスの行動、プラスの資質という意味で使われます。黒沢(二〇一二)では、「リソースとは資源・資質です。そこにあるものがリソースです。(中略)リソースは『売り』であり『強み』でもあります」と書かれています。例えば、得意な科目や特技、趣味など目立つような特別な良い何かがリソースとして扱われることが多いように感じます。

しかし、もともとリソースは資源という意味ですから、「使える」という点が大切です。使えるものであれば、特別な良い何かである必要はありません。小さなことでも、当たり前前のことでも、支援に活用できるものはリソースです。例えば、日本語が理解できることもカウンセリングでは重要なリソースです。日本語が理解できるから聞いたり話したりすることができて、カウンセリングが進んでいくのです。

「あなたが良いことをしたときに教えて」と働きかける



また、「担任の先生に認めてほしい」という気持ちを手がかりにして、A子に投げかけてみることもできます。大人に認めてほしいというのは、子どもにとってごく自然で健康な気持ちです。友達の良いことを報告できるのはすばらしいのですが、A子は、もっとストレートに自分を認め

てほしい気持ちを表現してもいいと思われれます。自分をストレートに表現できるようなきっかけになるような働きかけを工夫してみるのも有効な方法です。

例えば、「○○さんが消しゴム貸してあげてたんだね。○○さんもステキな子だけど、A子さんも良いところがいっぱいあるでしょ。『私も今日、こんな良いことしました』って、A子さんの良いところを先生に教えて」という働きかけが可能です。もし、その場で良いことを教えてくれたらば、すぐに、「やっぱりA子さんもちゃんと良いことしてたんだね。そういうのステキだね。また教えてね」とほめてあげることができます。

その場ですりつかなくても、「良いことをしているでしょ」と働きかけることは、A子自身を認めているというメッセージになります。思いつかなかつたり、見つからなくても、その投げかけ自体がA子自身の支えになるのです。そして、「また今度教えてね」と投げかけて終わりにしておけば、また、次につながっていきます。

帰りの会でほめる

「良いことをしている子を見つけたら教えて」という働きかけで、何らかの報告があれば、さらに支援をつなげていくことができます。それは、帰りの会で学級の全員の前でほめるという方法です。その場合には、良いことをしていた子どもだけではなく、A子のこともしっかりほめることが大切です。

1-2

担任の指示にまったく従わない子どもへの支援

例えば、「今日、A子さんが先生に、『〇〇さんが良いこととしてました』って教えてくれました。消しゴムを××さんに貸してあげてたんだって、優しいねえ。それを、ちゃんとA子さんが見ている、先生に教えてくれました。そういうことに気づくA子さんもステキだねえ。先生はとってもうれしい気持ちになりました」などと、二人をほめてあげることができます。

人の良いところを見つけることは、さらに次の良いことにつながっていくものです。こういった働きかけは、学級の中で、他の子どもの良いところを見つけて意識が広がっていくことにつながります。

A男、中学校二年生。怠学傾向があり、担任との関係が非常に悪くなっている。授業や課題に熱心ではなく、遅刻して登校してくることが多い。理科と数学は本人の中では得意で、授業にもある程度参加している。特に理科の実験は大好きで、熱心に参加することが多い。しかし、それ以外の科目では、机に突っ伏していたりすることが多い。

特に担任が担当している授業では態度が悪く、担任の指示にはまったく従わない。」起きてー」